

ぼくはチラシを裏返して、ぎっと目をとおす。細かい文字の中、二重線で囲まれている《チャンプ本》って言葉が目にとびこんできた。

「このチャンプ本ってなに？」

「ゲームだから一等を選ぶのよ。聞いた人が一番読みたくなった本に投票するの。今回は発表した人には後ろを向いてもらって、観客の人に手をあげてもらうのよ。それで多くの票が入った本がチャンプ本。選ばれるとそれはうれしいんだから」

ぼくはたくさん手があがるところを思いうかべた。チャンプ本ってひびきは魅力的だ。

「じゃ、元気に話せば、チャンプ本とれる？」

「うーん。うまく話せればチャンプ本をとれるってわけでもないの。つつかえながら話しても、思いが伝われば、勝てることがあったりするのよ。しいていえば本の選び方が大事かな」

「本か……。チャンプ本をとるには、どういうのがいいのかな」

「こらこら、聞きだそうとして」

クルミンは、笑いながら軽くぼくをにらむ。

